公正社会に関する英文研究書籍の出版について

2023 年 10 月

ポスト・コロナの時代に公正な社会を実現するための理論的・実証的な研究成果

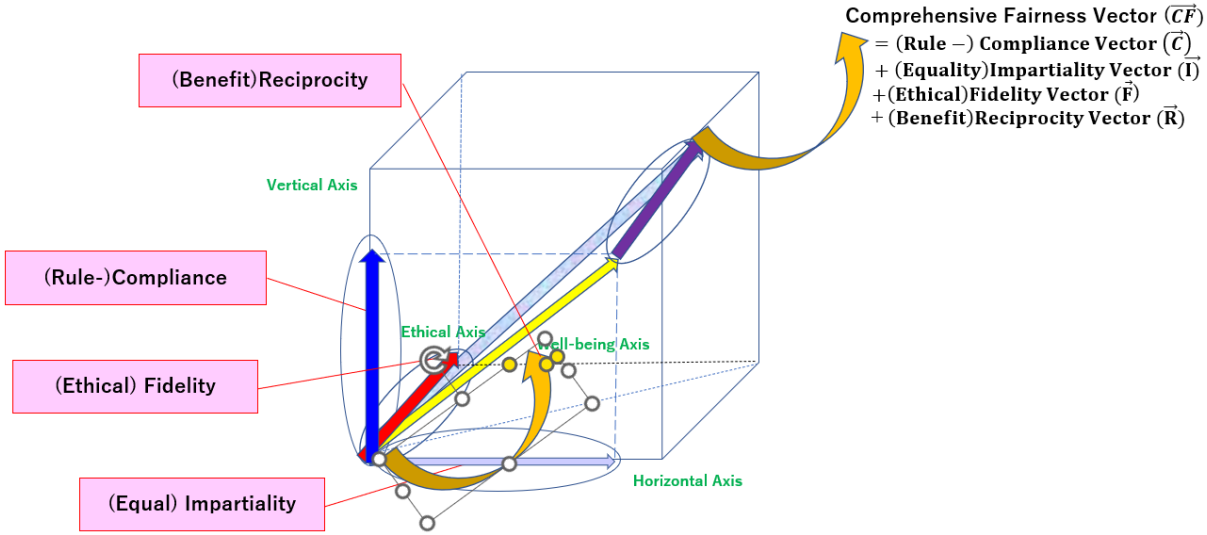
書籍のタイトル: Social Fairness in a Post-Pandemic World – Interdisciplinary Perspectives
出版社：Palgrave
出版年（月）：2023 年（８月）
DOI: 10.1007/978-981-19-9654-2
編者：石戸　光（Hikari　Ishido）・水島治郎(Jiro　Mizushima)・小林正弥(Masaya Kobayashi)・張暁芳(Xiaofang Zhang)
キーワード（英語）：COVAX, COVID-19, Pandemic, Economic recovery, Japan, China, Australia, Korea, European Union, Asia-Pacific, Mexico, South Asia, Global studies, Social justice

本研究書籍の問題意識

本書は千葉大学の国際高等研究基幹研究支援プログラム「公正社会研究」（代表：水島治郎教授）に参加する研究者らが中心となり、国際的な連携により、社会的公正の要素について理論・実証的に議論した学際的な研究成果である。コロナウィルス（COVID-19）によるパンデミック（地球規模の感染症）は、2019 年以降、世界規模で大きな損失をもたらした。その後遺症からの回復を続ける中で、長期的な被害を最小限に抑えるために、異なる集団間の社会的不平等に対処する必要があるものの、それは実現していない。そして、コロナウィルスの危機に関しては、公正さの定義が文脈によって異なることが、公正概念の共有を妨げている。

本書のベースとなる公正の概念

本書に通底する公正の概念は、下図の通りである。



注：Well-being の軸（４つ目の軸）は平面への表記上、曲線で表示している。

CREDIT：The Editor(s) and the Author(s), under exclusive license to Springer Nature Singapore Pvt. Ltd.

この図は、４要素からなる公正の「ベクトル」（概念提示は研究メンバーの小林正弥教授による）を示し、本書では公正に関するこの多次元的な概念を援用して政治的、社会経済的、環

境政策的観点よりコロナと社会についての多層的な現状分析を行い、それを通じて公正なポスト・パンデミック社会のあり方を展望している。

公正の４要素として、具体的には、「遵守性」（国際的条約および国内法に大きく関連）、「公平性」（基本的人権の平等な尊重に関連）、「公明性」（法的制約や文化的慣習に対する誠実な対応を意味する）、そして「互恵性」（国を超えて必要な財・サービスを実際に授受することに関連））であり、これらは概念上区別されつつも、公正概念の本質に照らして「不可分」の要素である。

本書の扱う分析視角および事例

このような公正概念を根底に踏まえつつ、千葉大学の上記研究グループは、ポスト・パンデミック時代における公平性を規定する側面と、不平等につながる格差について詳細な分析を行い、今回の出版となった。ポスト・パンデミック時代における学際的（政治的、経済的、歴史的、哲学的、心理的、そして文化的）分析を組み合わせることで、公正概念に関連する「格差解消」、「開放性」、「自由」、「幸福度（ウェルビーイング）」などに関しても斬新な視点を提示している。

上記の公正概念に関連して本書で扱われる事例として、たとえばパンデミックの規模を抑制する最も効果的な方法としてワクチン接種が浮上し、特筆すべきは、COVID-19 のワクチンを世界的に公正に分配するためにCOVAX 制度が確立されつつあることである。この点に関して本書では、規模に基づく「比例的な配分モデル」とは対照的に、実際のニーズに基づく「公正な優先モデル」の必要性を提示している。これは不可分の公正４要素のうち、特に「公平性」に一義的に関わる措置であり、ポストパンデミック社会において、ワクチン接種を超えた多層的な分野での拡大展開が望ましいといえる。

また社会経済的に弱小な国々への負担を軽減し、パンデミックの環境への影響にも対処するために、本書では、経済成長が環境保護に優先しないようなグローバルモデルの採用を提案し、さらに、パンデミックへの対応における地域差を考慮した形での政治的な再編成、世界貿易の開放性への変容、多様な人々の幸福度（ウェルビーイング）への影響に焦点を当てている。これらの社会的対応は「公平性」に加え、「遵守性」「公明性」「互恵性」に適う措置であり、パンデミックにおいてみられ、本書でも事例として扱う「格差」「ジェンダー差別」の解消およびコロナ禍という記憶の「社会的受容」、ひいてはポストパンデミックの社会構築に向けて、必要かつ不可分な公正概念である。

全体として、本書は COVID-19 のパンデミックが提起した家族単位、地域社会、国家単位および世界的なレベルにおける問題を浮き彫りにし、パンデミック後の公正な社会の構造のあり方について、新機軸を展開している。公正さに関する上記の 4 つの要素（これらは相互に不可分でもある）に基づいた本研究成果および今後の継続研究は、ポスト・パンデミックの公正社会がどのように出現しうるかについて、多元的かつ多層的な議論を展開しており、やはり多元的かつ多層的なグローバル社会における「公正」への理解とその社会的な実装を前進させうるものと期待される。